

2008 年 10 月

会社創立当時の思い出（昭和34年）

あれからもうまもなく「半世紀」が経とうとしている。当時入社した人はすでに定年で会社を去って久しい。本館とヒマラヤ杉が当時のおもかげを残しているが、中身は様変わり。作る物も、作り方も、仕事のやり方、環境も大きく変った。

馬電の歴史は自分自身の歴史でもある。パソコンも電卓もない時代、どうやって 仕事をしていたか・・・初心を忘れないために、創立当時を振り返ってみた。

（1） 当時の構内の様子

・木造の本館は、白亜の洋館のようで、高い煙突、ヒマラヤ杉とともに工場のシンボルだった。その本館は今でも健在だが、煙突はもう無い。本館裏の技術センターは、当時はバレーコート、テニスコート。本館2階から眺めると眼下は広々と、まるで公園のようだった。その裏の現在の食堂は、もと体育館。なぜか床はコンクリートで、ころぶと怪我をした。

・通勤は自転車か通勤バス。車通勤など考えられなかった。毎朝何台もの東武バスが連ね若さに溢れた女性達が降り立つ。この時間正門前は大変なにぎわいだった。夜間高校に通学する人もいて、学生服姿で通勤する人も目立った。構内には大きな自転車置き場が何か所かあった。

・第三工場が当初の組立工場で、ここで掃除機が生産された。「TC-203形：定価15500円」。今はもっと安く買える。まさに物価の優等生。ちなみに当時よく残業で食べたラーメンは45円だった。尾島のなんとかいうラーメン屋はうまかった。なぜか45円を覚えている。

（2） 開所式

・昭和34年5月に、県や町、三菱電機幹部らの来賓を招いて開所式が行われた。会場は第一工場の一角。そこに「ペギー葉山」が招かれた。歌った中の一曲が「南国土佐をあとにして」。この曲ができたのが同じ昭和34年5月。出来たばかりの曲。彼女の姿や顔は覚えていないが、この曲だけは覚えている。そのあとこの曲はみるみる大ヒット、彼女の代表曲となった。この曲を 聞くと、当時の開所式の様子がよみがえってくる。馬電と同年の曲である。

（3） 当時の仕事の様子

・事務所内は、冬はスチーム暖房で快適だったが、夏はたいへんだった。もちろんエアコンなんてなく扇風機。それも伝票や書類が飛ぶので仕事中はかけられない。汗で伝票や書類が手や腕にくっついて仕事にならない。黒い腕カバーは必需品だった。なにより伝票は大切だった。

・売上の計算は、全国から送られてくる伝票をソロバンではじく。達成率などの比率計算は、計算尺が重宝した。「計算尺」は、当時を象徴するものとして今でも大事にとってある。

・複数の書類や伝票は、中にカーボン紙を入れて書く。力がある。アンモニアくさい「オザ」とか、「バンダー」とかいうコピー機があったが、やたら手が汚れた記憶がある。正式な文書は、専門のタイプライターを打つ女性がいて一文字ずつ拾って打つ。電話は部屋に数台しかなく、外線は専門の交換手がいって、いちいちそこを経由する。書類も、専門の「私送便」のおじさんが東京の本社へ毎日大きなカバンを持って往復する。何もかも人海戦術だった。

これを思うと、今は何と便利で快適なことか。今はパソコンがみんなやってくれる。実績は翌朝には表とグラフで一目瞭然。判断も早い。「報・連・相」はメールでほとんどを行う。パソコンは1人1台、空調のきいた部屋でみんな黙々とパソコンに向かって 仕事をしている。パソコンがないと仕事にならない。この落差たるや・・・

しかし、そのためにコミュニケーションが希薄になったような気がする。隣りの人とのやりとりもメールで済ますらしい。また、パソコンになってすっかり字を書かなくなった。文字

は「書く」から「打つ」になった。漢字は「変換」というプロセスが加わった。これが漢字忘れの根源。今その変換さえ覚束なくなった。「計算」も電卓になって脳を使わなくなった。今「認知症」が増えたのも、これらのせいかも知れない。今から思うと、当時は不便な環境の中で一生懸命がんばっていた。それが活力を生み、様変りの 原動力になったように思う。

「初心忘るべからず」